

精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成していくプロセス

佐々木理恵

第1節 研究の動機と研究背景

本研究に取り組む直接的な動機は、自らのピアサポートワーカーとしての実践に基づく問いである。筆者は、縁あって自らの精神障がい経験を活かして働くピアサポートワーカーとなり、障害福祉サービスや精神科医療の場において実践を重ねてきた。実践を振り返ると、サービスユーザーの立場を維持しながらも自らがサービスの送り手になることによって抱いた戸惑いは多く、都度その戸惑いに揺れ、立ち止まり、模索を重ねてきた。また、今まさに困難の最中にある人のリカバリーに寄与することへの希望を胸に抱き入職するものの、ピアサポートワーカーとしての役割を担うことに対し、悩みを深め、抱え込むピアサポートワーカーも少なくない。その結果、不調をきたし休職や入院、また心ならずも職を離れていった仲間もおり、自らもピアサポートワーカーとして働く中での不調による休職を経験している。

一方、ピアサポートワーカーとして働く仲間の中には、休職や入院等を経験しながらも再び職場へ復帰し、不調時の経験を更なるエネルギーや想いに昇華させるような働きをする仲間も少なくない。その姿からは困難の経験を活かす働きの奥深さ、リカバリーやピアサポートの力を信じる姿勢を感じ、ピアサポートワーカーという役割のもつ価値や意義を認識せずにはいられない。そこから、筆者はピアサポートワーカーが働く中で感じる戸惑いや揺れ動く気持ち、また悩みをひとり抱え込むことによって起きるバーンアウトや、ピアサポートワーカーにとっての望まない休職・退職に至る現状があることに問題意識を持った。そしてピアサポートワーカーは、自身と向き合いながら、どのように既存の職場にピアサポートワーカーという新たな役割を生成しているのかについて、本研究で取り組むこととした。

近年、特に2000年以降、精神保健医療福祉サービスは当事者主体であるべきという流れに加え世界的にもリカバリー志向サービスへの転換が大きな潮流となっている。アメリカでは2003年の大統領新自由委員会レポートにおいて「精神保健システムをリカバリーに向けて方向づける」²⁾と示され、日本では2004年に厚生労働省による「精神保健医療福祉の改革ビジョン」において「入院医療中心から地域生活中心へ」とした。その中で「非常に有効なピアサポート等についての活用を図る」³⁾と示されたことによって、精神保健医療福祉サービスはリカバリー志向への転換を目指す動きが加速していく。

アメリカでは2004年に、後に全米ピアスペシャリスト協会となる活動が開始され⁴⁾、ピアサポートワーカーへの関心は2000年以降活発になっていく。我が国においても2014年に日本ピアスタッフ協会⁵⁾、2015年に一般社団法人日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構⁶⁾など、ピアサポートに従事するもの同士がつながり合う機会や団体が設立された。

我が国における当事者同士の支えあいは2000年より前からなされ、2000年前後から職業的性質を帯びるピアサポート活動が活発になった。そして、厚生労働省は令和3年(2021年度)度障害福祉サービス等報酬改定の概要(以下、障害報酬改定2021)において、「一定の要件を設けた上で、加算により評価する。」と明記し、ピアサポート体制加算およびピアサポート実施加算として報酬化を開始した⁷⁾。このことから今後一層のピアサポートワーカーの活躍の場や、雇用機会の拡大も予

想される。近年、我が国におけるピアサポートワーカーに関する研究や実践報告も多く見かけるようになってきたが、それらは主にピアサポートワーカーの固有性や有効性、意義、また彼らの育成体制や、既存の専門職との協働について述べられたものが多い。しかし、ピアサポートワーカー自身がどのようにして、既存の職場にピアサポートワーカーという新たな役割を生成しているのかについて、またそのプロセスに着目した研究はほとんどみられない。

そこで、本研究では精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成するプロセスを明らかにする必要があると考えた。

第2節 用語の作業定義

本研究におけるピアサポートとは、「似たような困難の経験や状況を有するもの同士による支え合い」と定義する。Meadらはピアサポートを「尊重しあうこと、責任を分かち合うこと、そして何が役に立つかについて相互に合意することという重要な原則の上に成り立っており、サポートを与え受け取るシステムである。ピアサポートは精神医学的なモデルや診断基準に基づいているわけではなく、情緒的および心理的な痛みを経験を分かち合うことによって、相手の状況を親身になって理解することである。」⁸⁾と定義し、ピアサポートには原則があり、その原則に基づく支えあいであるとしている。相川はピアサポートを「同様の経験をしている対等な仲間同士の支え合いの営みのすべて」⁹⁾と定義し、伊藤は「ある人が同じような苦しみを持っていると思う人を支える行為、あるいは、そのように思う人同士による支え合いの相互行為」¹⁰⁾と定義している。さらに、本研究ではピアサポートワーカーを、「所属機関と雇用契約を結んだ上で、自らの精神的困難を有した経験や精神保健医療福祉サービスを利用した経験を開示し、活かすことで、サービスユーザーのリカバリーや精神保健医療福祉サービスが、より良くなることを目的として働く職員」と定義する。

第3節 本研究の目的及び社会的意義

本研究の目的は精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成するプロセスを明らかにすることである。本研究の社会的意義は以下3点にまとめられる。

第一にピアサポートワーカーが役割を生成するプロセスを明らかにすることで、ピアサポートワーカー自身にとって、いまだどのような状況に置かれているのかを認識することができる。それにより、働くなかで起こり得る困難の想定が立ちやすくなり、働きに対する不安を軽減できる可能性がある。さらに、困難に対する方策の可能性が高まると考える。また先の見通しが持てることで、働くなかで、いまだどこに注力したらよいかについて、自身で把握できる可能性がある。第二にピアサポートワーカーを雇用する組織や、上司、同僚にとっても、ピアサポートワーカーが働くなかで感じる困難への認識が高まる。それにより、支えどころや業務内容および業務量の調整、合理的配慮等への視点に活かすことができると考える。第三にピアサポートワーカーを間接的に支える機能を有する、研修会や学習会等での学習内容に活かすことができると考える。

第4節 研究方法と分析方法

本研究は、理論生成型であることから質的研究法を採用する。調査協力者は所属機関との雇用契約に基づく形で働くピアサポートワーカーとした。インタビュー調査の方法はオンライン会議シス

テム（Zoom 等）の使用，または対面インタビューとし，調査協力者の希望する方法においてインタビューガイドに基づきながら約 90 分間の半構造化面接を実施した．インタビュー調査の際は，同意を得た上で IC レコーダーとオンライン会議システムの録音機能を使用し内容を録音した．その後データを逐語化し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析作業を行った．

第 5 節 データの収集方法と範囲とインタビューガイド

データ収集の範囲については，「精神保健医療福祉領域において，所属機関との雇用契約に基づく形で働き，雇用開始から約 3 年を経過し，週 20 時間以上程度勤務するピアサポートワーカー」を対象とした．調査協力者の選定に際しては，スノーボール法による選出が可能と考え，筆者がコンタクト可能である精神保健医療福祉領域におけるピアサポート関連の研修会や学習会，フォーラム等で出会ったピアサポートワーカーの方に協力を得ることとし，実際にインタビュー調査への同意が得られた 6 名にインタビュー調査を実施した．インタビューガイドは，入職から現在までの時間軸における，その時々 の出来事や気持ちを通して誰との，また何との相互作用であるか，そしてピアサポートワーカーとしての役割の生成においてどのように関連したかについて聞けるように作成した．

第 6 節 分析テーマの絞り込み

先行研究より，本研究において明らかにすべき問いにあたる分析テーマは，「精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成するプロセス」とした．当初は，「精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を獲得するプロセス」と暫定的に分析テーマを設定し，分析作業を進めていた．しかし，収集したデータの読み込みや，分析作業を進めるなかで，戸惑いや葛藤，揺れ動く気持ちは役割を生み出している中で起きていることが見えてきた．戸惑いや葛藤，揺れ動き気持ちは見られた場面として，ピアサポートワーカーが新たな役割を生み出す中での困難に遭遇する場面や，新たな役割としての仕事を，自ら生み出そうとしている場面，さらに新たな役割としての役割意義等を模索している場面等から伺えた．以上のことから，本研究における分析テーマは冒頭に述べたテーマとした．

第 7 節 分析焦点者の設定について

分析焦点者は，「精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカー」である．ピアサポートワーカーの雇用先は，主に障害福祉サービスまたは精神科医療が主であるが，その雇用実数は把握されていない．先行研究で述べた通り，ピアサポートワーカーは，雇用形態からくる悩みや，勤務上の責任の範囲，さらに働くうえでの役割の不明確さなど，その課題は多岐に渡る．これらのことから，分析焦点者は「精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカー」とした．

第 8 節 分析結果（図 1 結果図）

データから概念生成し，継続的比較分析を行い，最終的に採用した概念は 45，サブカテゴリーは 1，カテゴリーは 8 である（表 8）．本研究の結果図は，図 1 の通りである．その中で，中心となるカテゴリー（コアカテゴリー）は，【ちから湧くつながり】および【病の体験を活かすことの主体的探

【求】の2つである。分析の結果、以下のようなストーリーライン（全体像）を生成した。文中の<>は概念、[]はサブカテゴリ、【 】はカテゴリ、コアカテゴリには下線を入れ、すべてゴシック体の太字にて表記した。

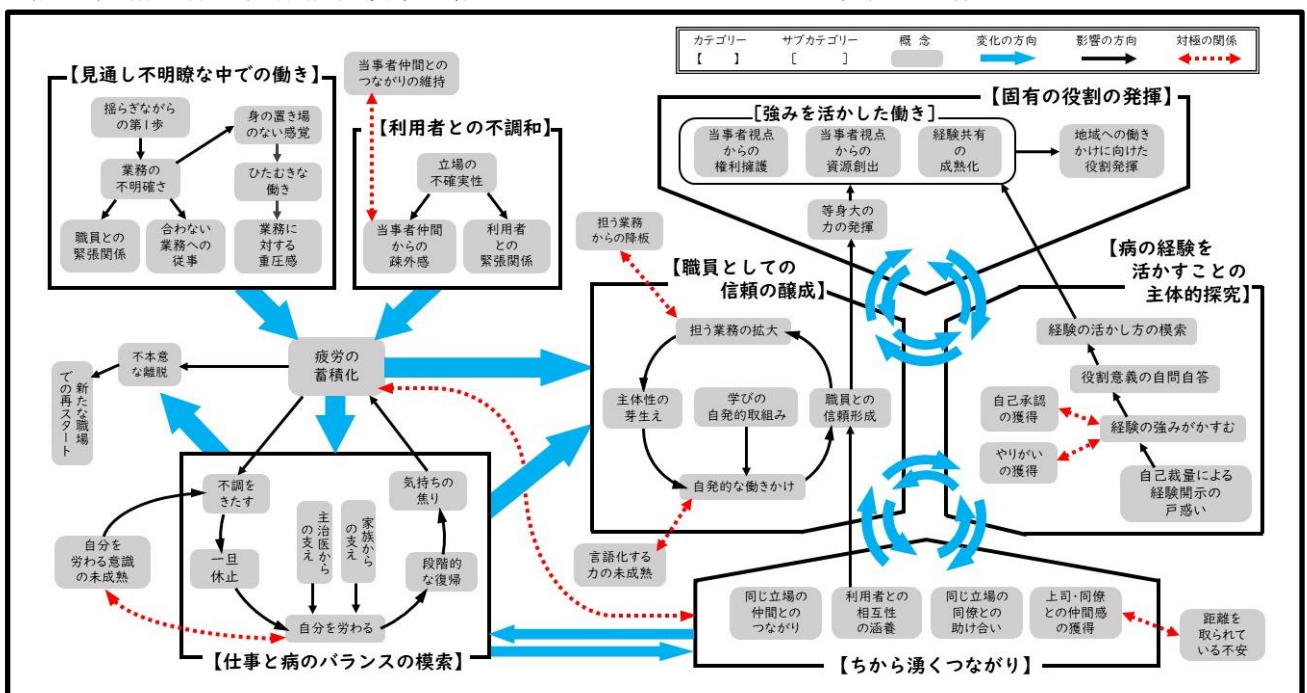
<全体のストーリーライン>

精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーは入職後、【見通し不明瞭な中での働き】と同時に【利用者との不調和】の経験から、【疲労の蓄積化】を起こしている。【疲労の蓄積化】の結果、<不調をきたす>に至り、ピアサポートワーカーという【仕事と病のバランスの模索】をするも<自分を労わる意識の未成熟>から、再び<不調をきたす>ループが生じ、職場からの<不本意な離脱>につながっていた。なお、<新たな職場での再スタート>をする場合もある。

【疲労の蓄積化】によって職場からの<不本意な離脱>がみられる一方で、<不調をきたす>ことがありながらも、【ちから湧くつながり】により<段階的な復帰>が促進される。【ちから湧くつながり】の中で、役割を継続する気持ちやピアサポートワーカーとしての<主体性の芽生え>がもたらされ、業務における<自発的な働きかけ>に発展し、職場内のいち【職員としての信頼の醸成】に至る。【職員としての信頼の醸成】がなされることにより<自己承認の獲得>や<やりがいの獲得>する一方、担う業務や職場におけるピアサポートワーカーへの理解状況等から、病の<経験の強みがかすむ>感覚を覚え、【病の経験を活かすことの主体的探究】を行っていく。その結果、ピアサポートワーカーとしての【強みを活かした働き】が生成され、【固有の役割の発揮】へと至る。

なお、【病の経験を活かすことの主体的探究】の姿は、【職員としての信頼の醸成】を強化させ、【ちから湧くつながり】を含めた循環の構造となっている。加えて、この循環の構造を基盤とし、【病の経験を活かすことの主体的探究】、【固有の役割の発揮】、【職員としての信頼の醸成】が相互に強化し合う、さらなる循環の構造となっている。

(図1) 精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成していくプロセス



第9節 結論 —本研究のオリジナリティー—

- (1) ピアサポートワーカーは、【見通し不明瞭な中での働き】と【利用者との不調和】とによって【疲労の蓄積化】に至ることが明らかとなった。
- (2) 【ちから湧くつながり】は、【病と仕事のバランスの模索】、【職員としての信頼の醸成】、【病の経験を活かすことの主体的探究】を下支えし、循環していることが明らかとなった。
- (3) 【職員としての信頼の醸成】に至るより以前の【病と仕事のバランスの模索】と【ちから湧くつながり】は、ピアサポートワーカーの働く土台を形成していくプロセスであることが明らかになった。
- (4) 【病の経験を活かすことの主体的探究】プロセスは、病の＜経験の強みがかすむ＞感覚を起点とした、＜役割意義の自問自答＞、＜経験の活かし方の模索＞を辿ることが明らかとなった。
- (5) 【固有の役割の発揮】は【職員としての信頼の醸成】や【病の経験を活かすことの主体的探究】を促進し、循環することが明らかとなった。
- (6) ピアサポートワーカーが、役割を生成していくプロセスは【見通し不明瞭な中での働き】や【利用者との不調和】から【疲労の蓄積化】に至る。そのなかで、【ちから湧くつながり】を大きな下支えとし、【仕事と病のバランスの模索】、【職員としての信頼の醸成】、【病の経験を活かすことの主体的探究】を経て【固有の役割の発揮】に至る全体像が明らかとなった。

本研究では、精神保健医療福祉領域で働くピアサポートワーカーが役割を生成していくプロセスについて考察してきた。本研究における調査協力者は、「精神保健医療福祉領域において、所属機関との雇用契約に基づく形で働き、雇用開始から約3年を経過し、週20時間以上程度勤務するピアサポートワーカー」であった。

全てのピアサポートワーカーが【疲労の蓄積化】を経験しており、試行錯誤や模索しながら、ピアサポートワーカーという役割を自組織において生み出そうと奮闘していた。そして、職場外で働くピアサポートワーカーとつながりを作り、維持することや、職場内でも職場職員と仲間になること、そして利用者との相互的な関係を生み出すなどのピアサポートの関係を作り出していた。これらの営みによる相互作用が、ピアサポートワーカー自身に気づきや主体性の芽生えをもたらしていた。さらに、それらとの相互作用によりピアサポートワーカーとして働くに際し、ちからが湧きでるようになっていた。

これまで、精神的な困難の経験を有するものはサービスの受け手であり、フォーマルな場において送り手の役割を担うことはなかった。しかし、欧米諸国でも新たな役割として注目を集め、日本においてもピアサポートワーカーの役割の解明や専門性、有効性、研修体制、彼らへのサポート等に関する研究や実践報告はあったものの、ピアサポートワーカー自身がどのようなプロセスを辿りながら役割を生み出しているのかについての研究は見当たらなかった。

本研究の最もオリジナルな点は、ピアサポートワーカーが役割を生成していくプロセスとして、【ちから湧くつながり】を得て【職員としての信頼の醸成】、【病の経験を活かすことの主体的探究】から【固有の役割の発揮】に至り、終わりなく練磨しあうスパイラルの関係を明らかにしたことである。

第10節 今後の課題

今後の研究の課題としては、以下の3点が考えられる。第一に、医療と福祉は、その制度背景等の違いから、領域を分けて役割を生成していくプロセスを検証していく必要がある。第二に、今後は雇用契約を結ばない形のピアサポーターや、ピアサポートワーカーの中でも経験を重ね熟達している方など、ピアサポートワーカーとしての経験別に焦点を絞り、検証していく必要がある。第三に、本研究は精神保健福祉士や看護師などの役割を形成していく、または役割を獲得していく研究から多くの示唆を得ることが出来た。このことから、他職種との役割を生成、または獲得していくプロセスと比較検討していく必要がある。

-
- 1) 相川章子 (2013) 『精神障がいピアサポーター 活動の実際と効果的な養成・育成プログラム』中央法規出版.
 - 2) SAMHSA (2003) 『President's New Freedom Commission on Mental Health : Achieving the promise.』
<https://govinfo.library.unt.edu/mentalhealthcommission/reports/FinalReport/downloads/downloads.html> 2022年9月20日アクセス
 - 3) 厚生労働省 (2004) 『精神保健医療福祉の改革ビジョン (概要)』
<https://www.mhlw.go.jp/topics/2004/09/dl/tp0902-1a.pdf> 2022年3月1日アクセス
 - 4) National Association of Peer Supporters (2022) 「The History of N.A.P.S.」
<https://www.peersupportworks.org/about/our-mission-vision-and-history/>
2022年9月1日アクセス
 - 5) 日本ピアスタッフ協会 (2022) WEB サイト <https://peersociety.jimdofree.com/>
2022年3月1日アクセス
 - 6) 一般社団法人日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構 (2022) 「日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構について」 <https://pssr.jimdo.com/> 2022年3月1日アクセス
 - 7) 厚生労働省 (2021) 「令和3年度障害福祉サービス等報酬改定の概要」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000759622.pdf> 2022年3月1日アクセス
 - 8) Mead, S., Hilton, D. & Curtis, L. (2001) Peer support: A theoretical perspective, *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 25(2), 134-141.
 - 9) 相川章子 (2017) 「ピア文化とコミュニティ・インクルージョン」『精神科』科学評論社, 31号, 538-543頁.
 - 10) 伊藤智樹 (2013) 「ピア・サポートの社会学に向けて」伊藤智樹編『ピア・サポートの社会学—ALS, 認知症介護, 依存症, 自死遺児, 犯罪被害者の物語を聴く—』晃洋書房, 1-32頁.